

## 第11分科会

### 「保育活動の取組と子どもの育ち」

#### ～コロナ禍の保育活動を経て

#### 見えてきた子どもの姿～

助言者	中村 礼香 (鹿児島女子短期大学 児童教育学科 准教授)
司会者	徳永智恵美 (錦城幼稚園)
問題提起者	田中 千佳 (鹿女短すみれ幼稚園)
記録者	井上友理香 (鹿女短すみれ幼稚園)
記録者	西牟禮美里 (鹿女短すみれ幼稚園)
運営委員	池田 俊彦 (かもめ幼稚園)

#### 【研究課題】

保育の計画と実践・評価・改善

#### 【研究・研修の視点】

「例年通り実施します」職員会議等で度々聞かれる言葉である。会議資料には行事の目的は記載されているが、従来の流れで保育活動が引き継がれていくことが往々にしてある。

ところが、新型コロナウイルス感染症の流行により、前例踏襲を見直さざるを得ない現実に迫られた。その結果、本園でも子ども達の命を守るために、幼児期に大切な経験を制限せざるを得なかった。

数年間、終わりの見えない感染症への対策に翻弄されたが、5類感染症になったことをきっかけに、新たな保育のスタイルに変化し始めた。

そこで本園では、昨年度から、コロナ禍の中で育った子ども達の姿を改めて見つめ直し、どのような経験が不足しているのか考察し、様々な保育活動の見直しを本格的に始めた。

今こそ、「それは何のために行うのか」「どのような子どもの姿を目指しているのか」本来の保育のねらいに立ち返り、引き続き感染症対策を行いながら、幼児期に必要な経験をできるように保育活動の見直し・改善を研究・研修の視点とした。

#### 【研究・研修の手がかり】

- ・ コロナ前・コロナ禍・コロナ後の保育活動を振り返り、子ども達が経験できていないことや子どもの変化を具体的に洗い出す。
- ・ 1年間の保育の集大成である「発表会」(2月中旬開催)に向けた活動を進める中で、保育活動の変化が子どもの姿にどのように影響しているかを研究する。また、現在の子どもの姿を観察し、心身共に成長する子どもの姿を見つめる。

#### 【研究計画】

(令和6年度)

- ・ 幼児期に経験する遊び・豊かな体験を行えるように職員で話し合い、保育活動や園内行事の見直しを行う。
- ・ 「発表会」に向けた活動を行う中で、必要な援助や経験を検討・実践し、子どもの育ちを見つめる。

(令和7年度)

- ・ 見直しを行った保育活動や園内行事の実践を踏まえた上で、今後の課題を考える。

## 【発表の概要】

### (1) 研究・研修テーマの捉え方

保育現場は、日々様々な課題が新たに加わり、常に細心の注意を払い子ども達の心身の健やかな成長を促さなければならない。本研究では、コロナ禍の保育活動を経験した子ども達の姿を見つめ、子どもの育ちに必要な保育とは何なのかをとらえていくことにした。

### (2) 研究の内容

- ・ 「発表会」に向けた保育活動を進める中で、子どもの姿を丁寧に観察し、どのような成長や課題が出てくるのかを確認する。
- ・ その課題を基に、どのような遊びや経験が不足していたのかを考えるとともに必要な保育者の援助を検証する。

### (3) 研究の方法

- ・ 「発表会」に向けた活動の中で見えてきた子どもの実態を洗い出し、その要因を探る。
- ・ 子どもの実態に基づく教師の手立てを講じる。
- ・ 教師の手立てによって子どもがどのように変容していったかを追跡調査する。
- ・ 次年度の「発表会」に向けた援助の在り方、活動内容等を明らかにする。

### (4) 実践例

#### ○ 年長組：劇「金のがちょう」の実践

- ・ 劇の題材決め、ストーリーに親しむ段階、劇の内容について話し合う段階、発表会に向けての練習、リズム室での練習、発表会当日における子どもの実態と教師の手立て及び子どもの変容

#### ○ 年中組：音楽劇「キツネのおとうさんが ニッコリわらっていいました」の実践

- ・ 音楽劇の題材決め、役決め、保育室やリズム室での練習、年次内での見せ合い・通し練習、発表会当日における子どもの実態と教師の手立て及び子どもの変容

### (5) まとめ

- ・ ここ数年は、新型コロナにウイルスに翻弄された保育現場であったが、これまで当たり前に行われていた保育活動を見つめ直し、子どもにも保育者にとっても新しい保育のスタイルを構築するきっかけとなった。
- ・ 子どもの育ちは、結果が出るまで時間を要することが多く、保育の成果はすぐには目に見えないこともある。
- ・ コロナ禍で縮小・削減せざるを得なかった保育活動や行事の積み重ねが、子ども達の経験や自信となり、様々な活動に意欲的に参加できるようになる姿につながっていくことを再確認できた。
- ・ 今後も日々の保育を常に見直し、その時代の流れに即しながら、子どもの育ちに欠かせない保育活動を実践することの大切さを実感した。

### (6) 今後の課題

- ・ 実践例を基に今回の研究を通して見えてきた子どもの育ちを『幼児期までに育ててほしい10の姿』と照らし合わせることにより保育を丁寧に捉えなおし、子どもの成長のために必要な新たな保育活動を模索する。

## 【討議の柱】

- ・ 引き続き感染症対策を行う中で、子ども達の育ちに欠かせない経験・遊びの選択について
- ・ 日々の保育活動が子ども達の様々な成長や次の遊びに繋がっていることを意識した保育者の援助の在り方

### 【公開保育の感想・質疑・応答】

- (感) 静の活動がとても落ち着いていた。
- (質) 様々な教具が準備をされていたが、活動に飽きてしまう子どもはいるのか。また、その際にどのような援助をしているのか。
- (答) 個人差はあるが、周りの子どもの活動を見て過ごすことも、活動の一部として捉えて保育をしている。
- (質) 教具は1年を通して、同じ物であるか。
- (答) 子どもの興味や季節ごとの行事に合わせて、塗り絵や季節にちなんだ教具を準備している。
- (質) ニコエコパンツについて
- (答) トイレトレーニング用で園で管理をしているパンツであり、綿100パーセントで特殊加工をされており、股の面積が広く作られている。脱ぎ着をしやすく、一般的なトレーニングパンツよりも尿の吸収も多く、肌触りがよく、気持ちが良い状態で過ごす経験ができる。0歳児から園で着用をし、快と不快の経験ができることができるため、排泄の自立に向けて利用をしている。失敗をした際には部屋の中にあるバケツの中へ持っていき、履き替えることができる環境を整えている。

### 【問題提議についての感想】

- (質) コロナ禍を通して変化が見られたことはあるか。
- (答) クラス全員で歌を歌う活動や見られる経験が不足しており、人前で発表をすることに抵抗を感じる姿があった。また、子ども同士で手を繋いだり、スキンシップを取ったりすることができないことで子ども同士での距離感が掴めない姿も見られた。粘土遊びや糊のぬたくりなどの感触遊びに苦手意識をもつ子どもも増えていると感じている。
- (質) コロナ禍を経て、行事や保育活動をコロナ前に少しずつ戻していく中で保護者からの意見を取り入れたか。
- (答) 発表会の参加人数を制限していたため、保護者からの声でYouTube配信を取り入れた。
- (質) 行事を自粛する中で、プラスになった事はあるか。
- (答) 運動会や発表会などのプログラムの変更をしていく中で、子どもや保育者にとってもよりよい保育に繋がっていった。
- (感) 声がとても聞きやすく分かりやすいプレゼンだった。コロナ禍で制限されることが多くあったが、子どもたちが行事に意欲的に参加することができるように工夫をして保育に取り組んでいることを知ることができた。
- (質) まねっこゲームや誕生日仲間について
- (答) リズムに合わせて担任の真似をして遊ぶ中で、少しずつ子どもが担任のように前に立ち発表をし、真似をしてもらい経験を積む。その子ども自身が皆に見てもらい真似をされる嬉しさを感じたり、真似をする子どもは特定の子どもをよく見て、周りの子どもと動きが揃うことを楽しんだりしてほしいという思いで取り入れている。誕生日仲間では、皆で手を繋ぎ輪を作り、自分の誕生日になると輪の真ん中に行き、踊る遊びである。初めは、踊ることに抵抗があった子どももいたが、一緒に踊ってみたり、たくさん褒めたりして自信をもって人に見られる経験を重ねていきたいと考えている。
- (感) まねっこゲームや誕生日仲間などの人前に入る経験を自分の園でも取り組んでいきたい。



### 【グループ討議内容】(記録により抜粋)

#### Aグループ

- ・ 異年齢児との関わりやルールのある遊び、人前に入る経験を大切にしている。
- ・ 年長児は、当番活動で友達の帳面を配る経験を通して、平仮名に親しんだり、人前で発言をする機会を設けたりして、就学に向けて援助をしている。

#### Bグループ

- ・ 文字遊びや数遊びを通して、発表会の台本を読めるようになったり、作品をipadで紹介することで人前に立ち、発言をする経験をしたりすることで発表会や就学へ繋がっている。また、以前の行事の内容が本当に必要であったかを検討し、保護者の意見を取り入れながら保育活動を行っている。
- ・ 子どもの意見を聞き、ねらいを考えて環境を整えている保育へ繋がっている。

#### Cグループ

- ・ 子どもや保護者が一緒にできる経験や幼少期であるからこそできる活動(泥遊びや素足で行う活動など)、異年齢児との関わりを増やすことで遊びが広がっていく。
  - ・ 一つの活動を繰り返し続けていくことが大切である。
- 例：名前を呼ばれて返事をする→運動会の返事をする

#### Dグループ

- ・ 誕生会や保育参観などの人に見られる経験を増やしている。
  - ・ 子どもの発言から一年間のテーマを設定する。
- 例：「種について調べる」①見つける ②育てる ③数える

#### Eグループ

- ・ 行事は子どもを中心に伸び伸びと楽しく活動ができるように残すところと制限をするところを考えている。
- ・ 毎週全学年で食事後に運動会に向けて体操をする時間を計画しており、参加をするために意欲的に給食を食べる姿があったり、運動会への期待が高まったりしている。

#### Fグループ

- ・ 子ども達にとって、本当に必要な経験は何かを考え行事を見直している。
- ・ 日々の保育の中で、人前に立つ経験を重ねることができるようになっている。

#### Gグループ

- ・ 行事があることの意義や夏野菜を育てることで植物の成長、命の大切さを感じることができるようになっている。
- 例：十五夜の団子づくりを、泥団子づくりとして行う。  
夏野菜を育て収穫し切る活動を行う。
- ・ 全身を使った活動から日常生活に繋がる活動を取り入れ、進級するごとに細かい活動をするなどの発達に応じた環境づくりを行う。
- 例：0歳児→ウッドデッキへ跳び箱やマットなどで全身を使って遊ぶ。  
1・2歳児→窓拭きやシール貼りなどの日常生活に基づいた活動をする。  
3歳児→以上児に上がった際に行う仕事を少しずつ経験する。

#### Hグループ

- ・ 歌や鍵盤ハーモニカなどの音楽活動は、音程を取るために必要な経験。
- ・ モンテッソーリ保育の中で、花を水に付けて、植物が水を吸収することを学び色板などの教具での活動に繋げていく。

#### Iグループ

- ・ コロナ禍で行事の見直しをするきっかけをつくることができた。子ども達にとって、必要な経験を考えて保育計画をする。
- ・ 子ども達が興味をもっていること、継続をしていきたい遊びなどを観察したり、一緒に取り組んだりして、子ども主体で活動することができるよう工夫をしている。

#### Jグループ

- ・ コロナ前に戻す中で、熱中症対策も考えながら保育を行う必要がある。
- ・ 子ども達の興味などから、マップをつくる。また、その日の保育を振り返り、次の日に繋がるような環境を整える。
- ・ 砂場遊びを導入として保育を行い、粘土遊びへと繋げる（砂ではつくることができなかったものが粘土ではつくれた）。

#### Kグループ

- ・ 友達同士での触れ合い遊びやスキンシップが必要である。また、マスク着用の生活から大人の表情を見ることが少なく表情から気持ちを読み取る力が不足している。
- ・ 異年齢児と関わる時間を設けることで、互いに教え合う姿が見られている。

#### Lグループ

- ・ 人前に立つ経験や戸外遊びや感触遊びなどの経験が必要である。
- ・ 異年齢児と関わる時間を設けることで、上級生を手本とし、真似をして過ごす子どもや下級生を大切にすることの姿が見られている。

#### Mグループ

- ・ 人との関わりをもてるように、コミュニケーションを取る機会が減ってきているため、地域との交流や異年齢児との活動を設けている。
- ・ 子ども達の興味を示した遊びを環境を整えて提供をしていく。また、活動後にがんばったシールを貼ることができるようにしておくことで、視覚からも達成感を感じ、意欲的に活動に取り組むことができるようになっている。

#### 【助言者のまとめ】

- ・ 表現力は、他人と円滑にコミュニケーションを取ることができる協調性や社会性を身に付け、将来高い理解力や判断力、思考力を養うための基礎づくりになるため、幼少期に表現活動を経験することは重要である。
- ・ 小学校学習指導要領においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること」と記載されており、幼保小連携のキーワードとなっている。
- ・ これからの保育において、「個別最適な学び」「協同的な学び」が重要になってくる。

#### 小学校教育では

- ① 個別最適な学びとは、一斉授業ではなくICTを活用し、一人ひとりの学習進度に合わせて学習を進めていくこと。
- ② 協同的な学びとは、個別最適な学びを行いつつ、孤立しないように皆で一つのものに取り組むという考え方である。

#### 幼児教育では

- ① 個別最適な学び→保育者が面白いと感じる保育から子ども自身が面白いと感じる保育。
  - ② 協同的な学び→保育者が面白いという子どもの気持ちを汲み取り、他の子どもに伝えたり、その内容を様々な遊びに広げたりしていく保育。
- ・ 保育の中に『PDCAサイクル』を意識的に取り入れることで、子ども達の立場に立つて何が必要であるかを考えるきっかけになることが個別最適な学びになり、子ども主体の保育に繋がっていく。
  - ・ すみれ幼稚園の年長クラスで実践していた空き箱を使った楽器作づくりからの遊びの発展として、音の高さに着目した楽器づくり、素材そのものの音を楽しむ活動、手づくり楽器を用いた合奏、図形楽譜といった活動が紹介された。
  - ・ 子どもたちのコミュニケーション能力やリズム感を高める表現遊びの例として、『おはながわらった』の歌に合わせて、「わらった」の際に手拍子をしたり、友達と一緒に手を合わせたりする活動の紹介があった。このような活動を幼少期から積み重ねていくとリズムを同期する力を培うことができる。